

P.L.バーガーのアイデンティティ論について

吉田 幸治*

本稿では、P.L.バーガーのアイデンティティ論を整理することにより、バーガーの現実構成論においては行為論的見地の不十分さから不明瞭であった人間と社会の関係図式の問題点をより明確化しつつ、「媒介構造」論で展開される社会の「正当化」の主張によって、彼の想定する社会理論が様々な価値観・行為原理を持ちうる人々の交渉的な相互行為の次元を設定せざるを得ないことを明らかにする。この点を明らかにするためには、バーガーのアイデンティティ論を彼の「ノモス - コスモス」論や「態度変更」論を通して理解する必要がある、最終的に生活世界領域における人々の調整的な行為実践という次元を補完的に挿入した「媒介構造」論の文脈で捉え直すことによって、個人が現代社会において自らと自らの世界にリアリティ（現実感）を感じられるようになることと、バーガーの想定する民主主義的な社会構成のあり方が同一の現象の二つの側面として理解可能であることを主張する。そしてそのような理論的補完の作業を経るならば、彼の現実構成論が現代社会の抱える社会統合の問題性を効果的に扱おうる社会理論として再生可能であることを主張する。

**キーワード：アイデンティティ 制度的世界 ノモスとコスモス 態度変更 尊厳
現代的多元主義**

はじめに

本稿では、バーガーのアイデンティティに関する議論を、彼の現実構成論が人間の意味問題に特化したかたちで展開されている「ノモス - コスモス」論や、彼の現代社会論的な見解が示されている「態度変更（alternation）」論及び「媒介構造」論を通して整理することによって、彼の社会学理論の主軸である「現実の社会的構成」論（以下、現実構成論と略記）においては行為論的見地の不十分さから不明瞭であった人間と社会の関係図式の問題点を、より明確化する事を目的としている。すなわち、彼の社会学

理論においては「人と社会の弁証法」という理論的テーゼが掲げられているにもかかわらず、その意図に反して一見すると非弁証法的な社会像が描かれる要因について、彼のアイデンティティ論の側面から明らかにする。またその上で、彼の現代的アイデンティティ形成に関する議論が社会的世界の多元化状況内での社会の「正当化」を論じた「媒介構造」論とともに理解されるとき、彼の現実構成論においては希薄であった、人々による相互行為を通じた社会構築の実践的契機に関する理論的萌芽が見いだせることを明らかにしたい。

そもそも、バーガーの描く社会像がともすれ

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

ば一元的かつ静態的なものになってしまう理由としては、現実構成論における社会的行為の説明が行為選択の「負担免除」の側面に矮小化して捉えられたことを主たる要因としている。またさらには、彼が個人のアイデンティティ形成を論じる箇所において「社会化」の側面を強調しすぎたあまり、個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和（symmetry）」が彼の現実構成論の前景に来てしまったことに由来している。これらの問題点は筆者の別稿においても取り上げたが、本稿では、現実構成論での社会構成に関するバーガーの理論的取り組みを彼のアイデンティティ論の観点から取り上げることによって、彼の現実構成論がなにもゆえ社会の秩序的性格を強調するものとなっているのかという点を明らかにしたい。すなわち、彼の社会理論の前提には、人々を無意味さの恐怖から守るために個人や世界が首尾一貫して説明されうような強固な制度的世界が必要であるという発想が色濃くあることを明らかにし、この発想こそが、バーガーが現実構成論においてアイデンティティの問題を語るときに、個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和」という側面を全面に出させる要因となっていることを明らかにしたい。またその上でさらに、個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和」というこの発想が、彼の社会理論を秩序志向的なものへと傾斜させる要因となっている反面、別面においては個人の側における社会的行為の有意義性の確保が念頭に置かれたものである点を明らかにしたい。なぜならばこの点を明らかにすることによって、バーガー理論における有意義性にこだわる発想が明らかとなり、この発想が後の現代社会論的な取り組みに見られる彼の現代人観や現代社会観と併せて理解されるならば、現代の

多元化状況が進展した時代における新たな社会構成の契機を捉えうる発想として理解可能だからである。バーガーは現代社会を、様々な価値観や相異なる行為要求がうごめく多元的・複合的な社会と捉えている。またさらに、現代人をそのような多元化された社会状況を社会化の場とし、「態度変更（alternation）」を重ねながら複合的なアイデンティティを形成していく存在と捉えている。ここで重要なのは、バーガーの社会学に通底する基本的な人間観、すなわち人間は不断に意味を希求する存在であるという人間観に依拠するのであれば、現代人とは、社会的世界の遍歴の過程において相異なる行為規範と遭遇し常にアイデンティティの危機にさいなまれながらも、社会の有意義性を志向しながら生きている存在として把握可能な点である。そしてそのような人間観に立った上で、現代人が「態度変更」を重ねながらもアイデンティティを形成していくという彼の主張を、「媒介構造」論で展開されている社会の「正当化」の主張とともに理解することによって、現実構成論においては明瞭な形で理論化されていなかった人々の交渉的な相互行為という次元が立ち現れることを明らかにする。

この「alternation」という言葉は、彼の現実構成論がまとまった形で展開されている『日常世界の構成』においては「社会化過程のやり直しを必要とする」「第一次社会化に似通った」過程として、強い意味での個人の主観的現実の修正に関わるものとして定義されている。ところが『社会学への招待』の補論「態度変更と生活史」や『故郷喪失者たち』では、現代社会の文脈で「alternation」が想定され、個人が様々な社会的現実を遍歴する過程を通して自己の内面に複数の自己了解が立ち現れることに主

眼をおいた議論が展開されている。すなわちバーガーは、現代においては人々が自らの生活史の中でいくつもの自己を体現していくことが不可避的に求められており、これを常に流動的な社会的現実を生きる現代人の基本的な特性とみなしているのである。

このように描出されるバーガーの現代的アイデンティティ像は、現実構成論の文脈に即して捉えることによってより一層、その現代社会論的な特性を表すこととなる。すなわち、現実構成論で論じられる社会モデルには、1)「個人」と「社会」が一对一の対応関係のように取り扱われている「前近代的社会モデル」、2)多元化した現代社会を対象とし、それによって「個人」や「社会」、及びその二者の関係が多層的、複合的に捉えられている「現代的社会モデル」という二つの社会モデルが想定されており、この2種の社会モデルに即して考えた場合、彼の現代的アイデンティティ像はそれぞれ別の様相をもって現れてくるからである。つまり1)の場合においては、「個人にとって世界が現実的であることの理解」という、社会化過程における個人の社会に対する原初的理解の重要性が強調されるタイプのアイデンティティ像として理解可能であり、2)の場合においては具体的な中間集団を表す「媒介構造」との関連でアイデンティティが把握され、「多元化した現代社会モデル」と複数の内的自己を持つ現代的アイデンティティとの関係が示されるのである。このようにバーガーの現代的アイデンティティ像を現実構成論における2種の社会モデルと関連づけて理解することにより、種々の社会的世界を遍歴する「態度変更」の帰結として描き出される現代的アイデンティティの問題が、個人の意識内在的な問題としてではなく、そのようなア

イデンティティの複雑性を構築するもとである外在的世界の複雑性との関連で明らかとなるのである。

たしかに上記のような論点は、バーガーの理論的営為には明示的に設定されているわけではない。とはいえ、彼の現代社会論には「公私領域の分離」というテーマが設定されており、私的領域からの公的領域への働きかけという実践的主張もなされている。すなわち、アイデンティティに関するバーガーの議論を彼の現代社会観・現代人観との関連で整理するとともに、「生活世界領域における人々の調整的な行為実践」という行為論的観点を補完的に挿入することによって、個人が現代社会において自らと自らの世界にリアリティ（現実感）を感じられるようになることと、バーガーの想定する民主主義的な社会構成（秩序の正当性は生活世界に生きる人々の営みによって獲得されねばならず、それゆえ社会は人々の交渉的な相互行為を基盤として構成される）の実践とが同一の現象の二つの側面として理解可能なのである。そしてそのような理論的補完の作業を経るならば、彼の現実構成論が人間と社会がともにつくり・つくられる弁証法的な関係を描きうる可能性を持ったものであることを示し、個人内在的には意味の危機、個人外在的には社会秩序の正当性の危機という現代社会の抱える問題性を効果的に扱える社会理論となる可能性が、見いだせることを明らかにしたい。

1. バーガー社会学における制度化論の特徴

本章ではまず最初に、バーガーの社会理論的取り組みが示されている『日常世界の構成』及び『聖なる天蓋』に即しながら、彼¹⁾の現実構

成論を理解する上で重要な位置を占める制度化論の秩序志向的な性格についてみていきたい。さらにその上で、彼の制度化論を個人のアイデンティティの側から見た場合、その秩序志向的な側面が人間の意味問題に関わるものとして論述されていることを確認する。すなわち、パーガーの言う制度的世界が、アイデンティティの側から見ると、個人が世界の無意味さに晒されて心理的アノミーに陥ることを回避するための盾という位置づけになっていることを確認したい。

1-1．パーガー現実構成論における行為論的観点の不十分性

パーガーは現実構成論において、人と社会の相互連関的な営みによって社会や個人が構成されていく様態を「外在化（externalization）」－「客体化（objectivation）」－「内在化（internalization）」の三項図式で説明する。パーガーにおいて社会とは、この三契機の弁証法的な過程とみなされるのである。そしてこの弁証法的観点こそ、人と社会が相互に影響を与え合いつつ変化していく様態を捉えるものであり、彼の現実構成論を動的な社会理論としているものである。しかしながらその彼の弁証法的意図は、必ずしも達成されていない。というのも、彼の現実構成論の前提には、人間が世界のなかで安定して定位しうするためには、人間の行動を一定の方向へと秩序づける制度的世界が必要であるとの立場が堅持されており、この立場が彼の社会理論における行為論的観点の不十分性となって現れているからである。この問題をさらに深めるならば、パーガーが現実構成論において、人間の行為をめぐる説明を行為選択の負担免除の側面に限定したかたちで捉えてしま

ったがゆえに、人が社会を作るという側面に即して考えた場合、彼の現実構成論においては一度構成された社会が再構成される様態、すなわち新たな社会秩序が再編成されていく側面を捉える視点が不十分となる問題点が浮かび上がるのである。そこでこの問題点について、彼の制度化論の内実をなす「外在化」及び「客体化」のそれぞれの契機に即して確認しておきたい。そしてさらに、この問題点が個人のアイデンティティ形成を論じた「内在化」契機の説明にも反映されていることをみていきたい。

彼の現実構成論がもっとも詳細に展開され、特に制度論との関係で彼の人間論的前提が如実に示されているのは『日常世界の構成』（以下『構成』と略記）においてである。彼は『構成』の第2部「客観的現実としての社会」において「外在化」及び「客体化」に関する説明を行っているが、そこではこの2つの契機が人間による制度的世界の構築という観点に即して論述されている。

彼はまず「外在化」契機の説明に際し、「人間は動物界においてある特異な位置を占めている。他の高等哺乳動物と異なり、人間には種に固有の環境、つまり人間自身の本能的構造によって厳密に形成された環境、などといったものは存在しない」²⁾と述べた上で、生物学的な観点から人間と環境世界との特殊な結びつきについて指摘する。すなわち、人間以外の動物がその生物学的装置によってあらかじめ決定された「閉じられた世界（closed worlds）」の中で暮らしているのに対し、「人間のその環境に対する関係は、世界開示性（world-openness）によって特徴づけられる」³⁾と指摘するのである。このようなパーガーの指摘は、人間の本来のあり方としての「自由」性を示唆するもの

でもある。実際バーガーは、『構成』が出版される3年前に書かれた『社会学への招待』において、人間の生活世界が自然的態度によって自明化されたある種の「閉じられた世界」であることを論述しながらも、その生活世界が人為的に構成されたものであるが故に絶対的なものではないことを強調し、人間とその世界が変化に開かれたものであることを主張している。しかしながら、『構成』においてはそのような主張は背景に退き、むしろ彼は、人間の身体が行動に安定をもたらす生物学的な手段を欠いているため、人間は自らの行動を方向づけるための社会秩序が必要である点に重きをおくのである。つまり、人間の世界開示性という性質は、社会秩序を可能とする制度的世界の形成によって「世界閉鎖性 (world-closedness)」へと変形されねばならないことに主張の強調点を移すのである。このことは、『社会学への招待』においては社会的世界を自明視する態度への意識批判という側面が強調されていたにもかかわらず、『構成』では以下に見ていくとおり、人間学的前提による制度的世界の自明性の必要性に焦点が据えられた理論構築となっている点に現れているのである⁴⁾。

彼は「外在化」契機について、「人間の存在は静止した内面性の閉じられた領域においては不可能である。人間は絶えず自己自身を活動の中に外在化 (externalize) しなければならない」⁵⁾と述べているが、この外在化の契機とは、人間がその生物学的な未熟さゆえに自らが定位する環境世界を人為的に形成することを意味すると同時に、人間がその世界において何者かであることが可能となるような、いわば自己自身の表現として世界を構築することでもある。このような外在化の概念規定は、ある意味で人間

の行為による社会形成の側面が語られたはずのものである⁶⁾。しかしながらバーガーは、この外在化による社会創出の側面を「社会秩序は人間によって不断に進行中の外在化過程において創造される」⁷⁾という発言にも見られるように、秩序形成の問題に特化するかたちで論を展開している。このような傾向は、実際に社会が形成されていく様態を捉える「客体化」契機の説明や、形成された社会が個人の主観的現実として理解されていく「内在化」契機の説明においても顕著に現れることとなる。

バーガーは『構成』での「客体化」概念の説明を、人間の活動を方向づけるための行為の「制度化 (institutionalization)」の説明として展開している。バーガーは客体化を「人間の活動の外在化された創造物が客観性という性格を獲得する過程」⁸⁾と定義するのであるが、ここで問題なのは、人間の行為に関する説明が、行為の方向づけを欠いた人間の心理的緊張を解消するための「負担免除」という側面に焦点が当てられた記述になっていることである。すなわち、人間の選択する行為が、社会的に共有された一定の類型化図式のなかに縮減されていく側面に行為の問題を限定しているのである。このようなバーガーの観点は、人間学的必然性 (anthropological necessity) に関する A・ゲーレン (Arnold Gehlen) や H・プレスナー (Helmuth Plessner) らの哲学的人間論に依拠している⁹⁾。実際バーガーは、『構成』での制度化論の脚注において、その発想をゲーレンに負っていることをたびたび指摘している。また、『構成』が上梓される1年前の1965年に、ゲーレンの著作活動とその内容を当時のドイツ社会科学界の潮流として紹介する内容の論文、「Arnold Gehlen and the theory of institutions」

を Social Research 紙上に掲載している¹⁰⁾。この論文の主要な記述内容は『構成』にもそのまま反映されている。以上のことから、バーガーがゲーレンの人間学的前提を受け入れて、自らの現実構成論の理論的基礎にしていると考えられるのである。

バーガーによると、人間の全ての活動は習慣化を伴い、習慣化された行為は行為者によって一つの範型として理解されるという。「人間のすべての活動は習慣化を免れ得ない。どのような行為であれ、それはしばしば繰り返されると一つのパターンに変化し、次いでこのパターンは労力の節約ということで再生が可能になり、事実上、その行為の遂行者によってその範型 (pattern) として理解されるようになる」¹¹⁾。そしてこの習慣化こそが「選択範囲を狭めるという重要な心理学的結果をもたらす」¹²⁾とされるのであり、これによって「人間の生物学的構造に欠如している活動の方向付けと特定化を可能にし、そのことによって、方向づけを欠いた諸々の衝動から生じる緊張の蓄積を解消する」¹³⁾とされるのである。

さらにバーガーは、そのようにして習慣化された行為がそれぞれの行為者によって相互に類型化され、その類型化された行為が他者と共に共有されることによって制度化が行われると述べる。「制度化は習慣化された行為が行為者のタイプによって相互に類型化 (typification) されるとき、常に発生する。いいかえれば、そうして類型化されたものこそが制度に他ならないのである」¹⁴⁾。すなわち制度とは、類型化された行為が人々に共有された状態のことをいうのである。そしてさらに、そのような状態が歴史性を獲得することによって、制度は自らの客観性を完成するとされる。すなわち社会が新た

な参加者を獲得し、その参加者によって類型化された行為が受け入れられたとき、制度的世界が完成するのである。ただしこの制度的世界は、その起源を新たな参加者によって問われたとき、それを首尾一貫した説得しうるかたちで示されなければならない。そのために行われる過程が「正当化 (legitimation)」である。正当化は意味の「二次的」客体化過程とされており、その機能は「すでに制度化されている<一次的>な客体化過程の産物を客観的に妥当なものにすると同時に、主観的にももっともらしいもの」¹⁵⁾にすることにある。

このような正当化の過程は、制度的世界が堅固な秩序をもつものとして成立するためになされる過程であるが、実はこの過程こそ、個人の主観的現実が形成されていく「内在化」契機とも重なる過程なのである。バーガーは正当化過程の説明において、制度的世界への新たな参加者に対してその世界が十全に理解される必要性を強調する。本稿において後に確認するように、正当化機構が十分に機能している社会においては、個人がそれまでと異なった別の解釈枠組みの世界に参加する場合には主観的経験において強い衝撃を伴うことになる。そしてこの衝撃は新しい世界への不信感を生み出すのであり、参加者によって疑義が申し立てられないよう、その世界は個人の主観的経験における深いレベルにまで正当化がほどこされなければならないのである。そしてこのような観点が、バーガーの「内在化」契機の説明においても、「社会化 (socialization)」を重視した以下のような論述として反映されるのである。

「意識のなかに一般化された他者が結晶化されたとき、客観的現実と主観的現実との間には調和

的な関係（symmetrical relationship）が確立される。＜外界＞で現実的なものが＜内界＞で現実的なものと一致するわけである」¹⁶⁾。

個人の意識内において、客観的現実と主観的現実とのこのような調和関係が築かれることによって、制度的世界は高度な安定性を獲得することになる。ところが内在化契機におけるこのような説明こそ、バーガーの現実構成論の問題性を如実に示すものとなっている。すなわち、人間と社会との関わり合いを示す上で特に重要な内在化契機の説明において、個人の構成する主観的現実と社会の客観的現実との高度な調和関係が理論的に想定されてしまうと、その両者の間に矛盾が想定できず、現実構成論において標榜されている弁証法的な社会把握そのものが困難になってしまうのである。つまり、人が社会を作るという側面に即して考えた場合、彼の内在化論においては、個人の意識内部で既存の社会とは違った新たな社会が構想される契機を十分に捉えることができないのであり、上述した「客体化」契機における行為論的観点の負担免除的側面への矮小化の問題とも相まって、彼の現実構成論を秩序志向的なものとする要因になっているのである。

しかしながら一方で、このような調和関係がバーガーにおいて重要とされるのは、客観的現実としての制度的世界が自らの意味秩序を社会化過程によって個人に注入し、そのことによって社会統制を可能にするという側面からだけではない。むしろバーガーにおいて社会とは脆弱なものと捉えられており、個人が世界を与えられたものとして内在化し、そうすることによって制度的世界が意味をなすような主観的現実を構成することによってこそ、制度的世界の存立自体が成立するものと捉えているのである。す

なわち制度的世界の意味秩序が、それを内在化した人々の行為実践をとおして不断に確認・再生産されることによって、客観的現実としての制度的世界は可能であると考えているのである。

またこのことは、個人の側においても同様である。すなわち人々の行為実践が可能となるためには、世界や自己が何らかの意味をなしていることの理解がまずは必要であり、その上でなおかつ、それらがいかなるものであるかの理解が必要なのである。そしてこのような有意味的行為を人々と実践していく世界のなかで、個人は自己が何者であるかの理解と確認が可能となるのである。本節で確認したように、バーガーの現実構成論はこの行為論的部分については不明瞭な部分が多いのであり、それゆえに全体として社会の保守的・静態的な側面が反映された社会理論の様相を呈しているのである。しかしながらその反面、社会の意味秩序を重視した彼の社会モデルは、社会と個人が意味を媒介にした両者の関わり合いによって成立する側面を的確に捉えてはいるのであり¹⁷⁾、特に人間の社会構成という側面から見てみると、個人が他者とともに意味を通して社会を形成することによって始めて、自らの存立が可能となる点を的確に示しているのである。すなわち彼の社会モデルでは、人間による社会構成の問題が、個人の意味問題にも関わるものとして捉えられているのである。そこで次節では、この個人にとっての意味の重要性という側面から論述された『聖なる天蓋』での「ノモス」-「コスモス」論を見ていくことにより、制度的世界の意味秩序が個人の存在を可能とすると同時に、それを「疎外（alienation）」するものでもある点を確認していきたい。

1-2. 「アノミー」の防壁としての「ノモス・コスモス」論

バーガーは『構成』と同様、『聖なる天蓋』（以下『天蓋』と略記）においても「外在化」－「客体化」－「内在化」の三項図式によって現実構成論を説明し、人間による制度的世界の形成について論述を展開する。しかし『天蓋』では、「制度化」と「正当化」の説明に該当する個所が「ノモス（nomos）」と「コスモス（cosmos）」という表現によって論が展開されており、ここでは人間経験の総体が各成員の共通の基盤となるように表象された意味と規範の秩序のことを「ノモス」と呼んでいる。この「ノモス」は、前節にて指摘した客体化の過程によって成立する制度的世界と同義であるが、より個人にとっての意味問題に即したかたちで論じられているのである。彼はこの『天蓋』において、人間が社会を構成する事の意味及びその性格について次のように述べている。

「もしも、社会的に構成された世界は何にもまして経験の秩序化（an ordering of experience）だとの命題が設定されるならば、もうそのことは理解してもらえよう。ひとつの意味秩序すなわちノモスは、個人の個別経験と意味づけの上に上乘せられる。社会が世界構成の企てだということは、それが秩序化すなわち規範化の営みだというに等しい。・・・【中略】・・・人間の社会性は、この秩序づけの営みの集合的な性格を前提としている。経験の秩序づけは、あらゆる種類の社会的相互作用に特有のものである。社会的行為はすべて、個人の意味づけが他者に向けられることを示し、進行する社会的相互作用は、一群の行為者の意味づけが集められて、まとまった共同の意味づけの単位になることを示している」¹⁸⁾。

このように、『天蓋』において示される人間

の社会構成の営みとは、個人が自ら自身とその世界の認識を可能とし、なおかつその成員間の有意味的な相互行為を可能とするための「経験の秩序化（an ordering of experience）」として表現されている。この意味秩序としての「ノモス」とは、個人の意味づけを越えて人々に共有されているという意味において規範秩序でもあるが、それを可能とする重要な機能としてバーガーは「言語」を挙げる。

「言語という事実は、たとえ単独にとり上げられても、経験に秩序を課すものであることが容易に理解される。言語は、進行する経験の流れに分節と構造を課することによって規範化する。経験の一項目が名づけられると、それは事実上この流れからとり上げられてその名どおりの実在として安定性を与えられる。言語はさらに語彙と統語法と文法を付加することによって諸関係に基本秩序を供給する」¹⁹⁾。

このような言語の機能によって、当該の社会成員が準拠しうる認識と規範の殿堂（edifice）、すなわち客観的に有効な一群の「知識」が供給される。そして人間が社会に参加するということ、すなわちある特定の社会的世界に参入するということは、「その<知識>を分かち合うこと、つまりそのノモスに共住する（co-inhabit）こと」²⁰⁾とされるのである。

このような「ノモス」の重要性は、個人がそれから離脱する事態になった場合、徹底した心理的混乱に陥るという指摘によって強調されている。すなわち意味秩序としての「ノモス」は、前節において確認したように、社会における知識の体系として客観的に構成された世界であると同時に、内在化の過程を通して個人の主観的現実を構成するものでもあるからである。そしてさらに、この意味秩序からの離脱とは、自ら

が何者であるかの定義づけを失うだけでなく、その意味秩序が主観的経験の深いレベルにまで達していることによって、自らの存在の喪失感をも引き起こしうるものだからである。このようにして個人のアイデンティティの側から「ノモス」の秩序機能を捉えるバーガーの指摘は、人間の意味問題に焦点をあてるものとして重要である。なぜならば、個人はこの内在化過程における「ノモス」の秩序化作用を通して自らの主観的な経験を組織化し、自分の生涯を意味あるものに作るからである。すなわちバーガーの言うとおり、個人が自らの主観的経験を「意味あるもの」として理解できるのは、社会の中で形成される意味秩序を媒介として、自らの経験がその社会の中で他者に対して開示可能なかたちで経験されるからこそなのである。そしてこのようなバーガーの認識が、彼の制度論に意味と規範秩序を志向する社会理論としての性格づけを与えることとなっている。そのような志向性は、「ノモス」を無意味さという恐怖から個人を守る盾として捉えるような、バーガーの以下の発言からもうかがうことができる。

「社会的に確立されたノモスは、おそらくその最も重要な局面において、恐怖を防ぐ盾として理解してよからう。言い方をかえれば、社会のもっとも大切な機能は秩序化 (nomization) なのである。これに対する人間学上の前提は、本能の力をもつかのごとく思われる人間の意味への執着である」²¹⁾。

もしこのように、ノモスが人間にとっての有意義性を確保する重要なものであると捉えられるのであれば、個人が自らの属する社会的世界から完全に離脱することは、自らの経験を現実性のあるものとして維持し得ない危機的な状況

を生み出すことになる。バーガーはこのような状況を「アノミー (anomy)」²²⁾と呼び、規範秩序としての「ノモス」の崩壊として捉えている。

「社会的世界から徹底的に離脱すること、すなわちアノミーは個人に対して非常に大きな脅威となる。個人が、そのような場合に情緒的なきずなを失うというばかりではない。彼は経験における方向性を失う。極端な場合には、現実感覚を失い、アイデンティティを喪失する。・・・【中略】・・・有意な他人との対話のなかで個人のノモスが構成され維持されるのと同様に、個人はそのような対話が極端に阻害されるとアノミーに落ち込むのである」²³⁾。

さらにバーガーは、このような「アノミー」をもたらす状況を「限界状況 (marginal situations)」と呼ぶ。限界状況においては、それまで自明とされていた社会的世界内でのいっさいの有意義性がおぼつかないものとなり、それに対する疑義の念が立ち現れてくる。彼はこの限界状況の例として、個人の所属する社会集団全体の存立が失われる場合や、離婚、生き別れといった有意な他者を失う場合を挙げている。しかしながらその最たる限界状況とされているのは、人間における「死」の問題である。社会的に規定されたすべての現実、死を典型とする様々な「潜在的な非現実 (lurking irrealities)」によって脅かされている。社会的に構成された「ノモス (規範秩序)」は、「アノミー (規範喪失)」へと至る不断の危険に直面しているのである。そこで、社会成員がこのようなアノミーへと至らないための究極的な社会的方途として行われるのが、人間による「宗教」の建立である。そしてこの宗教の建立こそ、前近代的な社会において最も一般的な「正当化」

の様式とされるのである。

バーガーにおいて「宗教」とは、「それによって神聖なコスモスが確立する人間の事業」²⁴⁾あるいは「神聖な様式におけるコスモス化」²⁵⁾と定義づけられている。ここで言われる「コスモス化」とは、人間の秩序の世界としての「ノモス」が究極的に意味づけられ、その意味が、「宇宙に内在する基本的な意味と考えられるものに合同するようになる」²⁶⁾ことである。すなわち「コスモス」とは、人間の秩序の世界（ノモス）を取り囲む宇宙的世界のことであり、そのノモスの意味がそこから派生していると理解されるような世界のことである。また「神聖」とは、「人間ではないが人間とかかわる神秘的で恐れ多い力の資質であって、一定の経験対象に宿ると信じられているもの」²⁷⁾である。このような神聖性は、自然、動物、あるいは人間、人工物といった様々なものに帰属しうるとされる²⁸⁾。そしてこのような神聖性の力こそ、人間の通常の生活を構成する「ノモス」を保護し、人々を「アノミー」から守る盾となるのである。すなわち神聖性は、人間経験において絶対的な他者性をもって現れる点にこそその特徴があるのであり、宗教はこの人間経験に対する超越性を取り込んだかたちでの意味投企を行う究極的な正当化機構として、「ノモス」に対し強固な基盤を与えるのである。そして宗教はこれようにして、人間経験のすべてを包括する単一の意味秩序を生み出し、限界状況をも正当化して、社会的に規定された現実を維持するのである。

しかしながら宗教によるこのような秩序維持機能は、それが神聖性によってもたらされる超越的性格によって可能であるため、不可避免的に人間経験の「疎外」という問題を引き起こす。『天蓋』において「疎外」とは、「社会的世界と

社会化された自我とが自然の事実性にも似た確固たる事実として個人に対立する」²⁹⁾こと、あるいは「個人と彼の世界との間の弁証法的関係が意識のなかで失われる過程」³⁰⁾とされている。すなわちバーガーにおいて「疎外」とは、個人の意識経験の状態として捉えられているのである。

「疎外とは、個人と彼の世界のあいだの弁証法的関係が意識のなかで失われる過程である。個人は、この世界がかつて彼の協力によって作り出され、現在も作り出されていることを<忘れる>。・・・【中略】・・・見方を変えれば、疎外は客体化のプロセスの行きすぎであり、それによって、社会的世界の人間的（“生きている”）客体性が意識のなかで自然の非人間的（“死んだ”）客体性に変形してしまう。典型的には社会的世界の現実を作り上げる人間的な意味の豊かな行為の表現が、意識のなかで非現実的で意味に乏しく生氣のない<事物>に成り代わる。つまり、これらは物象化されるのである」³¹⁾。（傍点は引用者）

そしてさらにバーガーは、疎外によって引き起こされる社会的世界の変容について、次のように述べる。

「社会的世界は、個人がそのなかで意味の豊かな行為によって自分の存在を拡大させたところの開かれた領野であることをやめ、その代わりに現在または未来の行為から離別された物象化の閉鎖的な塊になってしまう」³²⁾。（傍点は引用者）

バーガーはこのような事態を、「虚偽意識」の現象であると述べ、世界が人間の所産であることを理解しない意識のあり方として批判を行う³³⁾。しかしながらここで問題とされるべきは、バーガーの以下のような発言である。

「非常に重要なことは、この主観的疎外の現象

をアノミーと混同しないということである。逆に、そのような疎外はアノミーに対する最も効果的な障壁になることができる」³⁴⁾。（傍点は引用者）

このように、バーガーは「疎外」という事態に対する相反した評価を行っているわけであるが、このことは、個人にとっての主観的現実のあり方に対するバーガーの2つの見解が示されていることになる。すなわち一方は、個人が社会において有意味的行為が可能となるために、その個人の意識内において社会の客観的現実と個人の主観的現実の高度の調和が保たれるような主観的経験のあり方が重要であるという見解である。また他方では、そのような調和があまりにも高度になりすぎると、客体化のプロセスの行き過ぎとなり、結果として社会の物象化を引き起こしてしまうことへの警告である。このような2つの見解のうち、バーガーの論述では前者の側面に多くが割かれている。すなわち本節で確認してきたとおり、バーガーの現実構成論においては、自らとその世界の有意味性が確保されることによって初めて個人の存立が可能であるとの見解が強く示されるのであり、そのことが、社会と個人の意味的な調和関係を重視する秩序志向的な社会モデルへと帰結しているのである。そしてこのような帰結は、前節において確認したように、社会の意味秩序が個人の内に取り込まれ、その主観的次元において社会のあり方が再構成される側面を捉えた内在化契機の説明において、もっとも顕著に現れるのである。すなわち、個人の主観的現実と社会の客観的現実の一致を想定するような理論モデルが、それである。

ここでさらに注目すべきは、バーガーがこの疎外からの解放の契機についても、同じく内在化に関わる問題として捉えていることである。

バーガーは疎外を「個人と彼の世界との間の弁証法的関係が意識のなかで失われる過程」³⁵⁾とし、その結果として「社会的世界と社会化された自我とが自然の事実性にも似た確固たる事実として個人に対立する」³⁶⁾事として捉えている。バーガーにおいて疎外とは、個人の意識経験における世界や自己理解の特殊な状態として把握されているのである。しかし興味深いことに、バーガーはこのような意味と区別される「疎遠（estrangement）」の状態について論じており、この区別は疎外からの解放の契機を考える際に重要となる論点であると思われる。彼は個人の主観的経験において世界や自己が自らのものと感じる事ができない状態を「疎遠」に感じる経験と述べ、以下のように述べている。

「この疎遠（estrangement）こそは、人間の社会性において与えられ、いいかえれば、これは人間学的な必然だということである。ところが、そこには二つの進むべき進路があって、そのひとつは、世界と自我との離間が双方ともその人自身の行為の所産であることを<想起する>ことによって再結合される方向であり、もうひとつは、そのような再結合がもはや不可能で、社会的世界と社会化された自己とが自然の事実性にも似た確固たる事実として個人に対立する方向である。後者の方向は疎外と呼ぶことができよう」³⁷⁾。（傍点は引用者）

このようにバーガーにおいては、客体化プロセスの行き過ぎである社会の物象化（疎外）の問題に対し、意識のなかでその行き過ぎが理解され、人間による社会産出という人間学的前提が「想起（recollection）」されることにその解放の鍵があると考えられているのである。すなわち、内在化契機における社会と自己との弁証法的な過程が停止することなく、社会が人々に

よって共同して産出されているという事実が常に反省的に獲得されている意識の状態こそ、社会の物象化という事態への解放の契機と考えられているのである。この解放が単なる「想起」というレベルにとどまることができるかどうかは別としても、このことは、社会を物象化しないような世界の「内在化」の形式があり得るとバーガーが想定していることにほかならない。そして、そのようなかたちでの内在化のあり方とは、「態度変更」論に見られるバーガーの現代社会像、及び現代的アイデンティティ像のなかに見て取れるのである。

2. バーガー社会学におけるアイデンティティ像

本章ではバーガーの「態度変更(alternation)」論に注目することにより、彼が想定する現代社会におけるアイデンティティ像がいかなるものであるかを整理し、態度変更の常態化という現代社会の状況が、社会を物象化しないような内在化の形式をもちうるアイデンティティのあり方を用意するものであることを論述する。またその上で、『故郷喪失者たち』での補論「名誉という概念の衰退について」に触れ、ここで表明されている近代的価値観としての「尊厳」概念が、態度変更を常とする現代人の社会形成にとって重要な意義をもつことを論述する。すなわち前章でみてきたような、『構成』や『天蓋』で示される人間学的前提に基づいたバーガーの秩序志向的な社会観や人間観に対し、現代社会³⁸⁾に対する彼の時代認識のなかにこそ人々による創造的な社会構成を捉える視点が内在していることを指摘したい。

2-1. 「態度変更」論の展開による人間行為の

「世界開示的」側面への着目

バーガーの「態度変更(alternation)」論については、彼の現代社会論的見解が示されている『社会学への招待』(以下『招待』と略記)において論じられている。また、同じく彼の現代社会論的な取り組みが示された『故郷喪失者たち』(以下『故郷』と略記)においても、現代人が「転向を重ねる傾向(conversion-prone)をもつ」という表現も含め、態度変更のことが論じられている。ただし、この「alternation」という言葉は、彼の現実構成論が展開されている『日常生活の構成』では「社会化過程のやり直しを必要とする」「第一次社会化に似通った」過程³⁹⁾として、強い意味での個人の主観的現実の修正に関わるものとして定義づけられている⁴⁰⁾。

「社会化に関してこれまで述べてきたことは、すべて主観的現実をつくり変えることが可能である、ということの意味している。・・・【中略】・・・われわれはここではほぼ全面的に近い変化が生じる極端な例に焦点をしばってみることにしよう。それは人が<世界を住み変える>ような場合である。・・・【中略】・・・より小規模な修正と比べると全面的とも思えるほどの変化を示す、いくつかの事例というものはある。そうした変化をわれわれは翻身(alternation)と呼ぶことにしよう」⁴¹⁾。

『構成』でのこのような「alternation」の定義は、以下に見るバーガーの現代社会論的著作での定義のような、多様な社会的世界を渡り歩きながらそれらを内在化していくという、個人が世界に対して開かれた状態を意味するものではない。むしろそれは、社会が新しく用意する特定の意味秩序を十全に内在化し、社会にとっても、またその個人にとっても、その意味秩序が堅固となるようにするという側面が強調さ

れているものである。すなわち『構成』での「alternation」の定義は、制度的世界の意味秩序が個人の主観的意識のなかで固定化する側面に焦点があてられた、主観的現実と客観的現実との高度な調和を理論的に強調する内在化論の一部としてなされているのである。このような「alternation」の性格づけは、バーガーが、「翻身(alternation)の歴史的な原型は宗教上の転向(conversion)である」⁴²⁾と述べていることからもうかがえる。

ところが、『招待』や『故郷』といった現代社会論的な著作における「alternation」は、『構成』で例示されているような「宗教的転向」の意味合いが弱くなり、「転向」そのものが近代社会の展開によって常態化したという意味合いで説明されている。彼はこの点について、『招待』で以下のように述べている。

「近代社会において世界観がこのように変転きわまりない状態であることを見れば、我々の時代が転向(conversion)の時代として性格づけられてきたとしても、おどろくべきことではないだろう」⁴³⁾。

また『故郷』でも、近代人が「転向を重ねる傾向(conversion-prone)をもつ」という表現で、同じ内容のことが言及されている。

「近代人は、妙に『転向を重ねる傾向』があるだけでなく、それを自覚し、しばしば誇りとする。したがって、生活史(biography)とは、さまざまな社会的世界の間の移住や、いくつかの可能なアイデンティティをつぎからつぎへと実現することとみなされる」⁴⁴⁾。

このようにバーガーは、近代社会が個人にとっての「転向の時代」になったと指摘するわけであ

るが、このような事態は宗教の衰退と関連をもつものとして把握されている。すなわちバーガーにおいて前近代的社会から近代社会への移行とは、究極的な正当化体系としての宗教的世界観の弱体化として捉えられているのである⁴⁵⁾。そしてそのような弱体化とは、前近代的社会において包括的かつ一元的に意味づけられていた全体社会が様々な下位世界(subuniverse)へと分化する事を意味するのであり、近代以降の社会に生きる現代人は、独自に立ち上がったそれぞれの意味体系をもつ社会的世界を渡り歩きながらそこを社会化の場として、多様な価値観、行為原理を内在化していくものとして把握されるのである。つまり前近代人にとっては「転向」が強力な再社会化を意味するものであったものが、現代社会においてはその意味合いが薄れていくのである。このことを、バーガーは『招待』で以下のように言及している。

「われわれは転向(この言葉には宗教的な含意がある)という言葉をやめて、もっと中立的な『態度変更(alternation)』という言葉によってこの現象を記述してみることにしたい。今まで述べてきた知的状況【相対化の精神といった近代的な知的状況、引用者補記】によって、論理的に矛盾する意味体系を行き来しながら態度変更をしてゆく可能性が、諸個人にもたらされたことになる。個人がいずれかの意味体系に入るたびごとに、その意味体系は、彼の存在と彼のいる世界について、一つの解釈を与えてくれる」⁴⁶⁾。

バーガーはこのように述べ、「われわれの生活史とは多様な社会的世界の遍歴であり、それらの社会的世界に固有な意味体系の遍歴である」⁴⁷⁾とするのである。また『故郷』でも、「現代の人間は、非常に差異のある、しばしば相矛盾する社会的文脈の間で、絶えず態度変更

を行っている（alternate）。生活歴という時間的關係から見ても、多様な社会的世界の間をつぎつぎと移動している」⁴⁸⁾と述べられるのである。

こうして、現代人は自らの生活史を通して社会的世界を遍歴し、自己や世界を解釈する様々な枠組みを自らのうちに内在化するのである。そしてこのことによって、個人の意識内に複数の世界了解や自己了解が立ち現れることとなるのである。またさらに重要な点は、このように現代人が様々な社会的世界を渡り歩くことによって、個人の意識次元における主観的経験の流動性が高まり、そのことが現代人の「自己反省的な（reflective）」性格の高まりを産み出すという点である⁴⁹⁾。この点こそ、社会が人々によって共同して産出されているという事実を個人の意識のなかで不断に「想起」させる要因となりうるものであり、現代人が社会を物象化しないかたちで内在化を行うアイデンティティのあり方となりうるのである。そしてこのような、常に流動的な主観的経験を引き起こす社会状況のなかに生き、そのことによって強度の「自己反省的な（reflective）」性格を保持する現代的アイデンティティのあり方こそ、宗教という強力な正当化機構を備えた前近代的社会に生きる個人のアイデンティティのあり方と、大きく違う点なのである。そこでこの点について、次節で『故郷』の補論「名誉という概念の衰退について」を取り上げ、現代的アイデンティティのあり方が主体的な社会形成の契機でありうる点を確認したい。

2-2．前近代的アイデンティティと現代的アイデンティティ～「尊厳」概念の提示による主体的社会形成の契機～

バーガーは『故郷喪失者たち』の補論「名誉という概念の衰退について」において、現代社会とは「名誉（honor）」の概念が衰退して、かわりに「尊厳（dignity）」という概念が著しく伸張した時代であるとしている⁵⁰⁾。そしてこの論述のなかで、彼はこの2種の概念を社会におけるアイデンティティのあり方と関連づけて説明を行っているのである。

この補論で述べられている「名誉」とは、「生活（existence）をある種の祖型的な行動様式（archetypal patterns of behaviour）に関係づける企て」⁵¹⁾とされている。すなわち、「名誉の概念は、アイデンティティが、制度化された役割と本質的な、あるいは少なくとも重要な関連をもっていることを意味している」⁵²⁾ものとされるのである。そしてまた、このような「名誉」概念が意味をなす社会として、前近代的な社会が想定されているのである⁵³⁾。つまりこの補論で言われている名誉の世界とは、本稿においてこれまでに確認してきたように、個人がノモス・コスモスの調和的な意味秩序のなかに居住し、人々が何者であるかの明瞭な解釈がお互いに共有されるかたちで存在している社会のことである。そしてそのような前近代的社会に生きる人々が、社会による意味づけと個人の自己理解が高度に調和した状態を運命的に生きることによって価値を見いだすような世界こそ、彼の言う「名誉」の世界なのである。

それに対し、近代以降の社会を特徴づけるとされる「尊厳」概念は、以下のようなものとして述べられている。

「尊厳は、名誉とは対照的に、社会的に課せられたすべての役割と規範を脱ぎ去った、内なる人間性をつねに関連している。それは自己それ自体に固有のものであり、その社会的地位に関係なく、個人に固有のものである」⁵⁴⁾。

さらにまた、「近代的な尊厳の概念は、アイデンティティが制度化された役割には本質的に依存しないものであることを意味している」⁵⁵⁾とも述べられている。先に確認したように、名誉の世界に住む前近代人は、自己の行為が社会的役割として明確化され、意味づけが社会に依存しているのみならず、その価値までもが社会の意味秩序に依存する存在である。それに対し「尊厳」という近代的価値を体現する現代人は、自己の意味づけやその価値を、究極的には自らの実存によって導き出さねばならないことをバーガーは指摘しているのである。すなわち、このような近代以降のアイデンティティのあり方に付随する意識こそが、「まさにこの孤独な自己を、人間的尊厳と奪うべからざる人権の担い手と感知」し「正体を暴露された名誉の概念の残骸のまっただ中に尊厳を発見した」⁵⁶⁾とされるのである。つまりここにおいて彼は、堅固な意味的規範秩序をもつ制度的世界の衰退が人々に実存的な不安をもたらすことの危惧を表明する一方で、制度から引き剥がされた孤独な自己そのものを尊重すべきとみなす近代的意識が台頭してきたことの歴史的重要性を指摘するのである。そしてさらに彼は、以下にみるように、そのような近代的意識の擁護を行うのである。

「現代の諸制度とアイデンティティの布置に対する留保なしの告発は、まさにこの（近代的意識の）布置によってのみなされた大きな倫理的達

成 - いかなる社会的位置付けをも乗り越えた人間的存在そのものに由来する尊厳を備えた自立的自己の発見 - に気付かないでいる」⁵⁷⁾。

このようにバーガーは、この補論において近代的価値としての「尊厳」概念と、その担い手である現代的なアイデンティティの意義を明確に主張するのである。そしてさらに、バーガーは名誉の世界と尊厳の世界について、前者を「虚偽意識」として捉え、後者をそれからの解放の世界と捉える見解を示すのである。

「名誉の世界では、各個人は真のアイデンティティをその役割のなかに発見し、その役割から離反するということは、自分自身から離反することになる - それは『虚偽意識 (false consciousness)』である」とつけ加えたいのであるが、尊厳の世界においては、個人は社会から課せられた種々の役割から自己を解き放つことによってのみ本当のアイデンティティを発見することができる - 役割はたんなる仮面であって、彼を幻想と『疎外』と『悪しき信念 (bad faith)』に巻き込むものである」⁵⁸⁾。

そしてこのことと関わって、なおさらに重要な指摘は、バーガーが「名誉」と「尊厳」の世界におけるそれぞれのアイデンティティのあり方を、歴史とも関わる問題としている点である。このことについてバーガーは、「歴史に個人が関わるのは、特定の制度の歴史においても、彼の社会全体の歴史においても、制度化された役割の遂行を通じてである」⁵⁹⁾と述べ、名誉の世界と尊厳の世界では、それぞれのアイデンティティと歴史との関わり方が違うと論じるのである。

「名誉の世界では、アイデンティティは、祖型にはまった行為を繰り返すことを通じて、過去としっかり結びついている。尊厳の世界では、歴史

とは神秘化（mystification）の連続であり、個人はそこから自分を解き放って自己の『本来性（authenticity）』を実現しなくてはならないとされる」^{60）}。

このように、名誉の世界に生きる人間が役割取得を通じて社会のみならず歴史の中にも位置づけられるのに対し、尊厳の世界に生きる人間は「歴史」との結びつきを解き放ち、自己自身において自らの本来的なあり方を目指さなければならないと指摘するのである。ただしここで留意すべき点は、上記引用文中で言われている「歴史」が「神秘化の連続（the succession of mystification）」とされているように、彼は「歴史」を前近代的な社会における宗教のような正当化機構が生み出した「虚偽意識」として捉える一方で、現代的なアイデンティティの意識がそのような「歴史」の虚偽性を暴くことによって、現代人の「奇妙な非歴史性（a curious ahistoricity）」をも生み出すことを指摘している点である^{61）}。つまりバーガーは、前近代社会に生きていた人々が持ちえていたような、たとえば「虚偽」ではあっても主観的には確かなものとして感じる個人と歴史との結びつきを、現代人が喪失してしまったことを指摘するのである。このようなバーガーの見解は、本稿においてすでに確認したとおり、彼が「虚偽意識」や「疎外」という事態に対して両義的な評価を与えていることを反映したものである。すなわちこの補論においても、バーガーは「人間学的必然性」としての社会の堅固さの必要性を指摘しているのである。

しかしながら注目すべきは、バーガーが「虚偽意識」や「疎外」を批判するときに、これらの「虚偽意識」や「疎外」と、社会が人間にとって「疎遠」であることを分けている点である。

バーガーは『聖なる天蓋』での「疎遠」について述べた論述の箇所では、本稿第一章の末尾ですでに確認したように、「疎遠（estrangement）」と「疎外（alienation）」とを分けている。バーガーは疎遠と疎外が区別されなければならないとの指摘を行う直前の箇所で、社会が他者との共同作業によって形成されるものである以上、その形成物が個人の主観的経験において疎遠さを感じるのは当然だと述べている。また同時に、個人は社会によって社会化の過程を経て自己が形成されていく存在である以上、社会的自己が自らにとって疎遠さを感じることもありうるのも当然だと述べている。この「疎遠さ」とは、人間が産み出す形成物が「他者性」を帯びることであるが、個人の主観的経験において社会や自己がこのような「疎遠さ」を帯びて現れる点を、バーガーは人間の社会性のうちに見ているのである。

「人は社会での生活の結果として、自分の外と内の両方に＜他者性＞を生み出すということになる。人が自身で作り出すものは、それが社会的世界の部分である限りは、自分以外の現実となる。それは彼から＜逃走する＞。だが、人はまた、自分の一部が社会化によって形成される以上は、自分自身からも＜逃走する＞ことになる。社会的世界の他者性と社会生活上の他者である具体的な人間存在とは、意識のなかに内在化される。いいかえれば、他者と他者性とは意識の内部へ投入される。その結果、社会的世界が個人に疎遠なものに見えるばかりか、社会化された自我のある局面では自分が自分にとっても疎遠なものとなるという可能性さえあるのである。強調すべき大事な点は、この疎遠こそは、人間の社会性において与えられ、いいかえれば、これは人間学的な必然だということである」^{62）}。

前近代的社会においては、究極的な正当化機

構としての宗教が「神聖性」という絶対的な「他者性 (otherness)」を使用する事によって、人間経験の「疎外」とひきかえに社会秩序の安定性をもたらすとされていた。すなわち、人々が社会を感知するときに、それが他者との共同の行為の所産によって存在するという事実が「忘れ去られ」、その事実の「想起」が不可能な場合に、「疎外」という事態が発生するとされていた。これに対し、バーガーが近代的価値としての「尊厳」を主張したことの意義とは、この「他者性」ということが、現代社会においては個人の実存に取って代わったということを主張したかたちになっていることである。すなわち、多様な価値観や文化的背景をもつ「尊厳」されるべき個人の集まりであるがゆえに、社会が他者性を帯びているとの理解に転回しなければならないことを示唆しているのである。またさらに、選び取るべき価値や行為の選択肢が多様化した現代社会のなかで、そのような選択を自らの責任において行わなければならないという現代人像が提示され、なおかつそのような選択行為が、同様に「尊厳」されるべき人間が他にも存在しているという理解に基づいて、他者との関係性のなかで行われなければならないという現代社会像を示している点こそ、彼の現代社会論的取り組みが主体的な社会構成の契機を捉えていることになるのである。そしてさらに、彼の現代社会論的取り組みには、現代の新たな「疎外」や「物象化」の状況を捉える視点が内在している。すなわち、社会の他者性が人間の実存性からなるものであることが現代においても「忘れ去られ」、その他者性が社会システムによる匿名性に変換されていることこそが、現代の物象化にほかならないとの視点である。そしてそのような視点は、現代社会の問題性に

ついて実践的な提言が行われている「媒介構造」論において、現代社会での公的領域が匿名的な巨大制度として成立していることをバーガーが批判している点に、見いだすことができるのである。

3. 「媒介構造」論と現代的アイデンティティ

最後に本章では、前章までに描出したバーガー社会学におけるアイデンティティ像を、「個人と社会の関係性」という現実構成論での文脈に照らしてみた場合、アイデンティティが「社会」とどのように関わるものとして捉えられているのかを指摘する。その上で、バーガーの提言的な主張が含みもたれている「媒介構造 (mediating structures)」論に触れることで、彼の現代社会観・現代人像が反映した社会モデルが、多元化した現代社会に対して有効な社会理論となりうる可能性について言及したい。

『日常世界の構成』や『聖なる天蓋』において展開されているバーガーの現実構成論は、これまでに見てきたとおり、その社会モデルが人間学的前提に基づけられた秩序志向的な側面をもつものである。しかしながら、そのような人間学的前提が人間の意味問題を重要視するゆえのものであったと理解するのであれば、「内在化」論における個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和 (symmetry)」といった発想が、別様の解釈も可能である。またさらに、彼の現代社会論的見解を含んだかたちで示される社会モデルは、『構成』や『天蓋』で示される社会モデルを前提としながらも、現代人による主体的な社会形成という側面をより捉えうる可能性をもつものである。これらの点について、1995年に発表されたT.ルックマンとの共著、

『近代性，多元主義と意味の危機』の論述を取り上げることによって整理したい。

この著作では，態度変更が常態化するような現代社会においての社会統合の危機や，それに伴う個人のアイデンティティの危機の問題が主題とされている。そのなかで，社会が形成する意味秩序の強度と，その意味秩序によって形成されるアイデンティティの強度に関する興味深い記述が行われている。

「もし社会において意味の主観的及び間主観的な危機が発生し，それらが社会問題にまで発展するのであれば，その原因を主観そのものや人間存在に所与の間主観性に求めてはいけないう。それはむしろ，社会構造そのものに求められなければならない。・・・【中略】・・・パーソナル・アイデンティティの形成に対して一貫した意味が与えられる基礎となるような，間主観的な投影における十分な一致の構造的条件とはなにか」⁶³⁾。

彼はこのように述べた上で，時代を貫通する二つの社会類型として以下のように提示する。すなわち第1の社会類型とは，意味の異なった層や領域がよく統合された，単一で一般的に拘束的な価値システムをもつとされる社会であり，日々の経験や行為の図式から，非日常的現実へと向けられた人生の指導や危機管理といったより上位の行為図式までを包括する社会である。そしてこのような社会は，意味の全体的な在庫をもち，社会制度によって運営されていて，意味の危機に特に影響はないような社会類型とされている⁶⁴⁾。

そして第2の社会類型とは，人々によって共有され，個人を拘束する広範な価値がもはや人々に与えられておらず，また制度的にも保証されていないような社会類型である。この第2の社会類型の意味秩序が提供する価値は，人々

の生活のすべての領域に等しく浸透することもなく，それらの領域を統合することもない。そしてそのような社会こそ，主観的かつ間主観的な意味の危機を広める基本的条件をもった社会とされる⁶⁵⁾。またさらに，このような社会では価値は「私的領域」において見いだされるとの見解が示されるのであり，それは意味の危機を広げる条件であるとされるのであるが⁶⁶⁾，同じ社会に異なった価値システムや意味の共同体が共存するという，現代的な多元主義(pluralism)の条件でもあると指摘されるのである⁶⁷⁾。そしてこのような2つの社会類型は，彼の現実構成論において以下のような2点の社会モデルを示すものとして理解可能である。

まず1点目の社会モデルとしては，『日常世界の構成』や『聖なる天蓋』で示されるような，「個人」と「社会」が一对一の対応関係のように取り扱われる社会モデルであり，「前近代的社会」の説明に適合的なモデルである。すなわち正当化機構としての「宗教」が理論モデルのなかで強調されることによって，意味的に高次元で社会の「統合」が担保されるような社会を的確に捉えうるモデルである。そして2点目の社会モデルとは，多元化した現代社会が念頭におかれたものであり，それによって「個人」や「社会」，及びその二者の関係を多層的，複合的に捉えることが可能となるような社会モデルである。すなわち，すべての社会成員があらかじめ準拠できるような包括的・統合的な意味秩序が想定できず，それゆえ他者との交渉的な相互行為による意味形成という，行為論的な次元が想定されざるをえない社会モデルである。

このようにして，これら2つの社会モデルが現実構成論において想定されうるのであるが，この2点目の社会モデルについては，バーガー

の理論的営為としては明確化されていない。しかしながら、『構成』や『天蓋』で示される現実構成論の理論図式を彼の現代社会論的な取り組みと照らし合わせるならば、彼の社会学のなかにこの2点目の社会モデルが想定されていることがうかがえるのである。そして彼の現代社会論的取り組みのうち、特に「媒介構造」論に注目することによって、2点目の社会モデルが現実構成論における行為論的観点の不十分性を補完した社会モデルとなりうる可能性をもつものとして理解することができるのである。なぜならば、彼の「媒介構造」論では、人々による意味的な社会構成の次元だけでなく、それを可能とする母体としての具体的な中間集団が想定されているからである。つまりこの「媒介構造」論においては、人間の社会構成の問題が、具体的な社会集団を通じた社会的な行為実践の問題として論点化されうる可能性を持っているのである。

バーガーは「媒介構造」論において、現代社会を安定的で包括的な価値規範が成立しにくい多元化した社会とみなし、そのなかに生きる現代人が具体的な社会集団としての「媒介構造」を通して価値を内面化し、自己を意味づける作業を不断に行っていくものとして捉えている。そしてこのことは、社会化の場としての「媒介構造」自体が多元的に存在しているという現代的状況によって、個人は自己の行為に方向性を与える価値規範や意味秩序を最終的には自らの判断によって選択していかねばならないことを意味している。そしてなおさらにこのことは、このような個人の選択の問題が、『故郷喪失者たち』等でのバーガーの「態度変更」論にみられるような、様々な社会集団を遍歴することによる複数の世界了解の意識内在的な調整という

問題圏にとどまることができないことをも意味するのである。なぜならば、「媒介構造」は単に個人の社会化の場であるばかりでなく、それを通じて他者とともに社会秩序の「正当性」を構築する場でもあるからである。すなわち人々は、社会状況の多様化・複雑化に伴う現代社会の社会的齟齬の問題について協同して対処せざるを得ないのであり、媒介構造を通じた社会の正当性の構築において、他者との具体的な関わりのなかで自らの価値や社会の意味づけを選択し、それを表明し合いながら問題に対処するという社会的行為が行われなければならないのである。そしてまた、バーガーが「媒介構造」論を展開したことによって結果的に設定されることとなった、このような集団性を帯びた「主体化」の論点設定は、バーガーの社会学において人々の相互行為的な次元が内包されるかたちで論点設定がなされたものとして、理解可能なのである。

また、彼の現代社会論的な見解を反映した2点目の社会モデルを、以上のように人々による価値や意味づけを媒介とした社会構成の営みとして捉えるのであれば、先に挙げた現実構成論における1点目の社会モデルに関しても、別様の見方が可能となる。すなわち1点目の社会モデルは、バーガーが人間にとっての意味問題を両義的に重要視するゆえに、「個人」と「社会」を一对一の対応関係のように取り扱う社会モデルを提示したとして解釈することも可能なのである。これまでに確認してきたとおり、バーガーは「内在化」の説明において社会化の側面を重要視し、個人の主観的現実と社会の客観的現実の「調和 (symmetry)」を強調した理論図式を提示している。そしてこの理論図式をめぐる彼の論述は、本稿で確認したとおり、個人を

無意味さの恐怖から守るべく個人によっては揺るがすことのできないような堅固な意味秩序が構成されることの重要性という側面に強調点がおかれた論述となっている。しかしながらその一方で、主観的現実と社会の客観的現実の「調和」を強調するバーガーの発想は、人間の意味付与能力の獲得に関連するものとしても理解可能なのである。すなわちバーガーは、幼少期における世界と自己とのつながりの経験について重要視しているのであり、そのような自己と世界とのつながりの経験によって、個人にとって世界が現実的に存在するものであり、その世界が意味を有するものであることの原初的な理解が可能になると考えているのである⁶⁸⁾。そしてこのような見解が、バーガーが内在化論において主観的現実と社会の客観的現実の「調和」を強調する要因の一つになっていると考えられるのであり、このような観点からの「調和」の発想は、個人にとって自己と世界を関係づける能動的な能力を獲得するための根元的な基盤を形成するという側面に関して言えば、重要な理論的知見が含まれているとも言えるのである。

そしてさらに、こうした人間の意味問題を重要視するバーガーの発想は、「媒介構造」論において展開されている、日常的世界を生きる人々による下からの「自己統治（self-governance）」という議論⁶⁹⁾とも密接に関係しているのである。先に述べたとおり、バーガーは「媒介構造」論において、様々な価値規範や行為原理が多元化している現代社会での「正当化」の問題を取り上げている⁷⁰⁾。現代社会の「正当化」の問題とは、必ずしも意味の次元に限定されるものではなく、具体的には実践的な行為調整としての社会統合の問題にほかならない。しかしその一方で、現代社会における「正

当化」の問題が意味の問題と関わらないというわけではなく、この問題をよりの確に論点化するためにはむしろ、現代の社会統合の問題を積極的に人々の持つ意味の問題と関わらせることによって、主体的な個人相互の関わり合いを通じた社会構成という側面が捉えられなければならないのである。すなわち、社会の諸機能領域の分化によって、個人の社会的葛藤が心理次元の問題として私事化され、異議申し立てをされた場合には行政的に処理されることを常とする現代社会において、そのような葛藤の問題を社会と関係づけながら自己了解し、それを個人内在的な次元を越えて社会的に表出させる能力こそが重要なのである。

バーガーは「媒介構造」論のなかで福祉国家批判を行い、機能分化した専門家集団による社会領域の問題の行政的处理を批判するのであるが⁷¹⁾、このことは、日常世界を生きる人々が自らの世界を自分と関わらせるかたちで自己了解できず、それが現代社会の新たな「物象化」の現象になっていると捉えているからにほかならない。たしかに、社会の物象化の問題は意味の次元のみに限定して捉えることはできない。しかし、その解放の契機を個々の人間に求めるのであれば、その前提として、個人の側における自己と社会を関係づけようとする意志と能力が必要なのであり、このことは人間の意味問題と無関係ではないのである。つまり、個人が社会と関わるためには、社会がその個人にとって意味を有する現実性をもったものであるとの了解がまずは必要であり、その了解に基づいて社会の複雑な因果連関を認識し、それとの関わりで自らの自己理解を組織化し、自らの行為を社会的行為として、その行動に指針を示せるようにならなければならないのである。バーガーは現

代社会を私的領域と公的領域に二分化した時代として捉えるが⁷²⁾、世界に対する現実感や他者との基本的な関わり方を個人が獲得するのは、私的領域においてである。バーガーが直接的・対面的なコミュニケーションを特徴とする私的領域での現実構成に意義を見いだすのも、個人がそこでの経験を通して世界を理解し、その世界を全体として人間に関係づけようとする能動的な様式を獲得する場だと捉えたからである。そのような能動性の獲得こそ、人間の「主体化」にほかならないのであるが、「媒介構造」論では、個人がそのような「主体」性を獲得するために私的領域を保護し、個人と社会の「媒介構造」たる私的領域の主体性付与機能を高めることが提言されるのである。バーガーはこの「媒介構造」論において、日常的な生活世界に生きる人々による「自己統治」としての民主主義を強調するのであるが、そのような民主主義とは、人々の能動的な意味付与と行為という実践を通じた私的領域からの公的領域への働きかけのことである。そしてバーガーは、そのような働きかけによって現代社会のテクノクラシー化に対抗し、公的領域における匿名的な巨大機構を人間化しようと試みるのであるが、このような提言こそ、バーガー社会学の中に「脱物象化」を志向する具体的かつ実践的な契機が存在することを示しているのである。

注

- 1) 『日常世界の構成』はT.ルックマンとの共著であるが、バーガーが共著者に加わった著作にはある種の一貫性が保持されており、本稿では以下、共著者が存在する著作においても「彼」と一人称で表現する。
- 2) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *The Social Construction of Reality*, Doubleday Anchor, [1966]1967, p47. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977年, 82頁)。
- 3) *Ibid.*, p47. (邦訳, 83頁)。
- 4) 『社会学への招待』とその後の著作におけるバーガーのこのような強調点の推移については、筆者の別稿で詳しく論じている。吉田幸治「P.L.バーガー『現実の社会的構成』論における問題性と可能性」『立命館産業社会論集』第37巻第4号, 立命館大学産業社会学会, 2002年3月, 195-219頁。
- 5) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*, [1966]1967, p52. (邦訳, 91頁)。
- 6) この点に関しても、上述した筆者の別稿において、物象化を論じたバーガーの論文を取り上げて考察を行っている。吉田幸治2002年3月。
- 7) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*, [1966] 1967, p52. (邦訳, 90頁)。
- 8) *Ibid.*, p60. (邦訳, 104頁)。
- 9) *Ibid.*, p17. (邦訳, 26頁), 及びp195. (邦訳, 327頁)。バーガーは『構成』の「序論」において、彼の人間学的な諸前提が、初期マルクスの人間学的前提とともにH.ブレスナーやA.ゲーレンの人間学にも影響を受けている事を述べている。また脚注においては繰り返しゲーレンについて言及されており、「外在化」概念に関する脚注では、人間の生物学的な特質を哲学的人間学の観点からみた重要な論者として挙げられているほか、そのような哲学的人間学の観点を社会学的な制度論へと発展させた人物としてゲーレンが取り上げられている。バーガーはこのほかにも、社会の制度化について論じた『構成』第2部「客観的現実としての社会」の脚注において、度々ゲーレンに言及している。
- 10) Peter L.Berger (with Hansfried Kellner), “Arnold Gehlen and the Theory of Institutions”, *Social Research*, Vol.32, 1965, pp110-115.
- 11) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*, [1966]1967, p53. (邦訳, 91頁)。
- 12) *Ibid.*, p53. (邦訳, 92頁)。
- 13) *Ibid.*, p53. (邦訳, 92頁)。
- 14) *Ibid.*, p54. (邦訳, 93頁)。
- 15) *Ibid.*, p92. (邦訳, 157頁)。

- 16) *Ibid.*,p133. (邦訳, 225頁)
- 17) ただし本文でも指摘したように、個人の意識レベルにおける客観的現実と主観的現実の調和が高度に想定されると、後に本稿で取り上げる「疎外」という事態が発生することになり、意味を媒介とした人と社会のつくり合う関係が失われてしまう。パーガーの社会学にはこのような「疎外」を批判する視点が内在しているのであるが、その批判の視点が彼の理論構築のなかには前面に現れないのであり、その結果、全体として社会の秩序志向的な側面が強調された社会理論モデルになっているのである。なおこのような問題性については、筆者の別稿において詳しく解説している。吉田幸治2002年3月。
- 18) Peter L.Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday Anchor, [1967]1990,p19. (園田稔訳『聖なる天蓋』新曜社, 1979年, 28-29頁)。ただし訳語を一部変更している。以下、本稿での引用文中の訳語に関しては、必要に応じて筆者が変更を加えている。
- 19) *Ibid.*,p20. (邦訳, 30頁)
- 20) *Ibid.*,p21. (邦訳, 31頁)
- 21) *Ibid.*,p22. (邦訳, 32-33頁)
- 22) *Ibid.*,p190. (邦訳, 32頁)。パーガーは脚注において、この「anomy」がデュルケムの「anomie」の英語訳であることを補記している。
- 23) *Ibid.*,p21. (邦訳, 31-32頁)
- 24) *Ibid.*,p25. (邦訳, 38頁)
- 25) *Ibid.*,p25. (邦訳, 38頁)
- 26) *Ibid.*,pp24-25. (邦訳, 37頁)
- 27) *Ibid.*,p25. (邦訳, 38頁)
- 28) *Ibid.*,p25. (邦訳, 38頁)。パーガーはその例として、聖なる岩、聖なる道具、神聖化された族長などを挙げる。またこの神聖性は空間や時間にも帰属される場合があり、神聖な土地や神聖な季節などのかたちで体现されるとしている。
- 29) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131頁)
- 30) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131-132頁)
- 31) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131-132頁)
- 32) *Ibid.*,p86. (邦訳, 132頁)
- 33) *Ibid.*,p86. (邦訳, 133頁)
- 34) *Ibid.*,p94. (邦訳, 146頁)
- 35) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131頁)
- 36) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131-132頁)
- 37) *Ibid.*,p85. (邦訳, 131頁)
- 38) 本稿において筆者のいう「現代社会」、あるいは「現代人」とは、基本的にパーガーの原著書でいわれている「modern world」や「modern man」を指している。ただし彼の現代社会論的著作においては「前近代的(premodern)」な世界との対比で論が展開されている部分もあるため、必要に応じて引用文・本文ともに「近代」の用語も併用している。
- 39) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *op.cit.*,[1966]1967,p157. (邦訳, 264頁)
- 40) 本文下記の引用文中にあるように、『日常世界の構成』における「alternation」の定義部分においては、邦訳書でも衝撃度の大きい主観的現実の修正という側面を強調した「翻身」という訳語が当てられている。ただし、この「alternation」が論じられた部分では、現代的な再社会化のあり方に触れられている箇所もあり、そこでは「自己変容」と訳し分けられている。しかしながら、本稿において指摘したとおり、『日常世界の構成』での「alternation」の論述はそのほとんどが強度の高い主観的現実の変更とその維持の側面について論じられており、その側面が引用文として挙げた定義部分にも現れていると言える。
- 41) *Ibid.*,p157. (邦訳, 264頁)
- 42) *Ibid.*,p158. (邦訳, 266頁)
- 43) Peter L.Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963,p50. (水野節夫, 村山研一訳『社会学への招待』思索社, 1979年, 75頁)
- 44) Peter L.Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), *The Homeless Mind*, Random House Vintage,[1973]1974,p77. (高山真知子, 馬場伸也, 馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社, 1977年, 86頁)
- 45) *Ibid.*,p185. (邦訳, 214-215頁)
- 46) *Ibid.*,p65. (邦訳, 97頁)
- 47) *Ibid.*,p65. (邦訳, 97頁)
- 48) Peter L.Berger (with Brigitte Berger and

- Hansfried Kellner), *op.cit.*, [1973]1974, p184. (邦訳, 214頁)
- 49) *Ibid.*, pp77-79. (邦訳, 85-88頁) バーガーは『故郷喪失者たち』において、現代人のもつアイデンティティの特性として、以下の4つを挙げている。すなわち、アイデンティティが社会に対して特別に開かれた (peculiarly open) 状態にある点、アイデンティティが細分化 (differentiated) されている点、アイデンティティが自己反省的な (reflective) 性格をもっている点、アイデンティティが自己中心的な (individuated) 性格をもっている点、である。
- 50) *Ibid.*, p85. (邦訳, 98頁)
- 51) *Ibid.*, pp86-87. (邦訳, 99頁)
- 52) *Ibid.*, p103. (邦訳, 104頁)
- 53) *Ibid.*, p87. (邦訳, 100頁)
- 54) *Ibid.*, p89. (邦訳, 102頁)
- 55) *Ibid.*, p90. (邦訳, 104頁)
- 56) *Ibid.*, p88. (邦訳, 102頁)
- 57) *Ibid.*, p95. (邦訳, 109頁)
- 58) *Ibid.*, p90-91. (邦訳, 104頁)
- 59) *Ibid.*, p91. (邦訳, 105頁)
- 60) *Ibid.*, p91. (邦訳, 105頁)
- 61) *Ibid.*, p91. (邦訳, 105頁)
- 62) Peter L.Berger, *op.cit.*, [1967]1990, p85. (邦訳, 130-131頁)
- 63) Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *Modernity, Pluralism and the Crisis of Meaning*, Bertelsmann Foundation Publishers, 1995, p23.
- 64) *Ibid.*, p27.
- 65) *Ibid.*, p24.
- 66) *Ibid.*, pp26-27.
- 67) *Ibid.*, pp24-27.
- 68) Peter L.Berger, "Reflections on Patriotism", *Facing up to Modernity*, Basic Books, 1977, pp118-129. バーガーはこの「Reflections on Patriotism (愛国心についての省察)」と題されたエッセーのなかで、幼少期における故郷 (home) での直接的・対面的な世界との接触体験が、その後の匿名的な社会領域に対する関わり方を規定する重要なものであることを指摘している。
- 69) Peter L.Berger (with Richard Neuhaus), *To Empower People*, second edition, Michael Novak (ed.), The AEI press, [1977]1996, pp152-153.
- 70) *Ibid.*, pp148-149.
- 71) *Ibid.*, pp157-164.
- 72) Peter L.Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), *op.cit.*, [1973]1974, pp63-82. (邦訳, 70-94頁) この点に関する整理された見解は、『故郷喪失者たち』第3章「社会的世界の複数化」において見いだすことができる。なおバーガーの現代社会論的著作における公的領域と私的領域の二分化論については、筆者の別稿においても詳しく取り上げている。吉田幸治「P.L.バーガーの『媒介構造』論について～バーガー社会学における行為論的『主体化』契機の可能性～」『立命館産業社会論集』第38巻第3号、立命館大学産業社会学会、2002年12月、113-130頁。

文献リスト

- Peter L.Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963. (水野節夫, 村山研一訳『社会学への招待』思索社, 1979年)
- Peter L.Berger (with Stanley Pullberg), "Reification and the Sociological Critique of Consciousness" *New Left Review*, No.35, [1965]1966, pp56-71. (山口節郎訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』第二号、せりか書房、1974年、94-117頁)
- Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *The Social Construction of Reality*, Doubleday Anchor, [1966]1967. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1977年)
- Peter L.Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday Anchor, [1967]1990. (園田稔訳『聖なる天蓋』新曜社、1979年)
- Peter L.Berger (with Brigitte Berger), *Sociology: A Biographical Approach*, Basic Books, [1972]1975. (安江孝司, 鎌田彰仁, 樋口祐子訳『バーガー社会学』学習研究社、1979年)
- Peter L.Berger (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), *The Homeless Mind*, Random House Vintage, [1973]1974. (高山真知子, 馬場伸也,

馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社，1977年）

Peter L.Berger (with Richard Neuhaus), *To Empower People*, second edition, Michael Novak (ed.), The AEI press, [1977] 1996.

Peter L.Berger, *Facing up to Modernity*, Basic Books, 1977.

Peter L.Berger (with Thomas Luckmann), *Modernity, Pluralism and the Crisis of Meaning*, Bertelsmann Foundation Publishers, 1995.

Peter L.Berger (with Hansfried Kellner), “Arnold

Gehlen and the Theory of Institutions”, *Social Research*, Vol.32, 1965, pp110-115.

吉田幸治「P.L.バーガー『現実の社会的構成』論における問題性と可能性」『立命館産業社会論集』第37巻第4号，立命館大学産業社会学会，2002年3月，195-219頁。

吉田幸治「P.L.バーガーの『媒介構造』論について～バーガー社会学における行為論的『主体化』契機の可能性～」『立命館産業社会論集』第38巻第3号，立命館大学産業社会学会，2002年12月，113-130頁。

On P.L.Berger's Theoretical Work on "Identity"

YOSHIDA Koji *

Abstract: In this paper, I examine P.L.Berger's theoretical work on "Identity," and through this examination, I make it clear that his theoretical schema of man and society in his social theory "The Social Construction of Reality" has some problems because of his inadequate dealing with social actions. Moreover, I also make it clear that a theoretical level of social actions performed by people who have various values and codes of actions should be set up in his social theory because of his own suggestion of "legitimation" of society in his work on "Mediating Structures." In order to achieve these purposes, I examine not only his work on "Identity" but also his work on "nomos-cosmos" and his work on "alternation." And furthermore, I propose that his theoretical work on "Mediating Structures" should be revised by the addition of a theoretical level of social actions performed by people who live in the life-world. Finally, I state that if his social theory is revised as described above, it could explain that what an individual feels to be "reality" in his world and what people construct as a democratic society are two sides of the same phenomenon. By this revision of his social theory, I also state that his social theory can regenerate as an effective social theory that deals with a matter of social integration in the modern world.

Keywords: identity, institutional world, nomos and cosmos, alternation, dignity, modern pluralism

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University